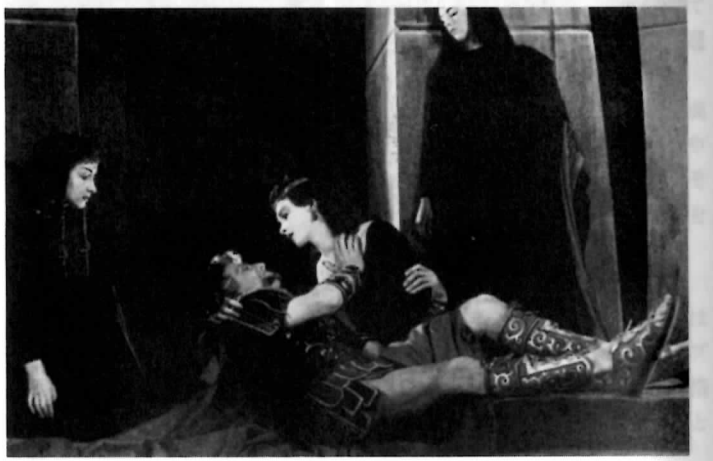
『マクベス』第二幕第三場　(photo : Roger Wood)
マクベス　誰に出来るというのだ，狼狽のうちに落着き，……それを同時に？
(マクベス：ポール・ロジャーズ，マクベス夫人：アン・トッド)



『アントニーとクレオパトラ』第四幕第15場　(photo : Pamela Chandler)
アントニー　おれは直ぐ死ぬのだ，エジプトの女王，もう直ぐに。
(アントニー：キース・ミッチェル，クレオパトラ：マーガレット：ホワイティング)

中村保男

アントニーとクレオパトラ

THE TRAGEDY OF
ANTHONY and CLEOPATRA.

[主要登場人物]

マーク・アントニー
オクテイヴィアス・シーザー
レピダス
……ローマの三執政官
セクスタス・ポンペイアス
ドーミシアス・エノバーバス
スケイラス
メシーナス
ドラベラ
サイディアス
メーナス
カニディアス……アントニーの副官
クレオパトラ……エジプトの女王
オクテイヴィア……シーザーの姉
チャーミアン……クレオパトラの侍女

これほど想い想われた二つの魂　ジュリアス・シーザーを暗殺したブルータスを打ち破り，ローマの三執政官の一人となったマーク・アントニーと，かつてはみずからの魅力でジュリアス・シーザーの心をもとりこにした妖艶なエジプト女王クレオパトラとの，成熟したと言うよりはむしろ爛熟した恋愛を中心としたローマ悲劇。史実を踏まえた一種のセミフィクションである。

エジプトのアレクサンドリアでマーク・アントニーはクレオパトラの色香に迷って，愛の歓楽に耽っている。至急ローマに帰還せよという召喚にも応ぜず，それを見た部下たちは「世界（ローマ帝国）を支える三本柱の一つが変りも変ったものだ，今は娼婦お抱えの阿呆になってしまった」と嘆くほどだ。

当のアントニーはそれを知ってか知らずか，こう豪語する。

「ローマの都もタイバー河に飲まれてしまうがいい，伸びゆく帝国に跨る広大なアーチも落ち崩れるがいい！　これこそおれの宇宙だ。王国などは土くれ同然，このけがらわしい大地ときたら，畜生も人間も見さかいなしに餌をくれる。人生に貴きものありとすれば，ただこうすることだ。（クレオパトラを抱く）これほど想い想われた二つの魂が，このような

二人の男女が，こうして抱きあえるなら，もうそれだけでよい，おれは世間の奴ばらに有無を言わさず認めさせてやる，それだけで二人は眉をあげ，無類の仕合せ者と言いきれるのだと。」(第一幕第一場)

部下たちの見たアントニー像と，アントニー自身のそれとの懸隔は余りにも大きい。この落差，このアイロニカルな対比が悲劇『アントニーとクレオパトラ』の基調を成していることを私たちはすでにこの冒頭の部分で察知するのである。

だが，いかにクレオパトラにのめりこんでいようと，妻のファルヴィアが三執政官の一人オクテイヴィアス・シーザー(ジュリアス・シーザーの甥の息子)に反逆したのちに死に，セクスタス・ポンペイアスがシーザーに海戦を挑んでいることを知ると，アントニーも重い腰をあげてローマに帰国せざるを得なくなる。その留守中，クレオパトラは侍女のチャーミアンがジュリアス・シーザーをアントニーになぞらえたのを叱って，「もう一度シーザーを，私の大事な，あの男のなかの男とも言うべきお方の引合いに出したりしようものなら」チャーミアンの歯を折ってやると言い，連日，アントニーに便りを出す。

やはり三執政官の一人であるレピダスの，ローマにある邸宅で会合が行われ，アントニーの弟と妻とがシーザーに反旗をひるがえしたのはアントニーを決起させるためだったと言ってシーザーがアントニーをなじり，あやうく言い争いになりそうになるが，そこでシーザー側の将軍アグリッパが一案を出す。シーザーの姉オクテイヴィアとアントニーは結婚したらどうかと言うのである。アントニーはこれを承諾し，シーザーと共にオクテイヴィアと会いに出かけることになるが，そのあとで，アントニーの古くからの親友であるエノバーバスは，エジプトの国土とその女王クレオパトラのすばらしさや，アントニーがクレオパトラと初対面した時の様子について語り，次のように詩的な描写をする。『アントニーとクレオパトラ』は豊饒で多彩，壮麗なせりふで書かれている部分が多いことで有名だが，それらの中でもこれは白眉とも言うべきせりふである。

「まず（クレオパトラが）身を横たえたる小舟は，磨きあげたる玉座さながら燃ゆるがごとく水面に浮び，艫に敷かれた甲板は金の延板，帆には紫の絹を張り，焚きこめられた香のかおりを慕って，風は気もそぞろの恋わずらい，櫂はいずれも白銀，笛の音に合せての見事な水さばきは，立ち騒ぐ波も我遅れじと慕いまつわるかに見えました。かの女人その人はと言えば，到底言葉には尽せませぬ，垂れ布は色絹に金糸銀糸の縫取り，その陰にひっそり身を横たえた姿は，なるほど，かの絵筆の妙よく自然を超ゆる画中のヴィーナスも遠く及ぶところにあらずとでも申しましょうか。両脇に侍する童は頬に笑窪を湛え，笑めるキューピッドさながら，五色の扇をもって風を送ると，冷めた頬は二たび上気して，その薄い肌に血がのぼり，かくして上げたり下げたり。」(第二幕第二場)

さて，メシーナスはさすがのアントニーも今度ばかりはクレオパトラと別れるだろうと楽観論を吐くが，エノバーバスはそんなことはあり得ないと答える。後者にはアントニーの心が分りすぎるくらいよく分っているのだ。

アントニーはオクテイヴィアと結婚したのち，エジプト人の占者に，自分の運よりもシーザーの運のほうが上向くのかと問うと占者は，アントニーはシーザーの近くにいない時だけ守護霊が優勢になる，と答える。これを聞いたアントニーは「骰子までがあの男（シーザー）の心に随う，勝負事をすれば，技では上手のおれが運では必ず負ける，籤を引いても，あれの勝ちだ」とみずから認める。

勇気が理性を食い始めると…

再びエジプトに赴くことにしたアントニーは，まずシーザーとレピダスと共にシシリア島へ行き，ポンペイアスと会合する。ポンペイアスは自分の指揮下にあるガレー船上に三人を招待し，一夜の宴を催し，レピダスは酔いつぶれて寝床まで運ばれなくてはならなくなる。ポンペイアスの部下メーナスはポンペイアスの耳にこう囁く。三人の客を殺してくれと私に命じて下されば，あなたは世界の支配者になれるのですが，と。これに対してポンペイアス

は「ああ，それを，貴様，なぜ黙ってやってのけなかったのか。おれの立場では，そいつは陰謀というものだ，それが貴様なら忠義になる。よく覚えておけ，おれにとっては利益よりも名誉が大事なのだ，名誉がな。もう取り返しはつかぬ，貴様の舌が貴様の行いを裏切ったのだぞ，知らされずにいれば，後でよくやってくれたと思いもしたろう，が，それも今は郤(しりぞ)けねばならぬ。忘れろ，さあ，飲め」と言う。現実政治の冷酷さをこれほどよく示している場面は稀であろう。

一方，アレクサンドリアでは，クレオパトラがアントニーとの同棲生活を陽気になつかしんでいるところへ，イタリアからの使者が，いかにも凶報を携えて来たと言わんばかりの浮かぬ表情で到着する。案の定，アントニーがオクテイヴィアと結婚したと言うのだ。かっとしたクレオパトラは使者を打ち殺しかねまじき剣幕で叱りつける。

ほどなく自制を取り戻したクレオパトラの前にその使者が再び現われると，彼女は恋敵であるオクテイヴィアの容姿のことを訊き，オクテイヴィアが30歳のやもめで，声も背も低く，円顔でひたいも狭いと聞いて胸を撫でおろす。変転きわまりない女王の心の内を暴露する場面の一例だ。

新妻のオクテイヴィアとアテネに着いたアントニーは，シーザーが自分のことをけなし，取決めに背いてポンペイアスに戦いをしかけたことを知る。そればかりか，シーザーがレピダスを捕えて監禁していることも分る。そこでオクテイヴィアは，夫アントニーと弟シーザーとを仲直りさせる目的でローマに引き返すが，アントニーが再度エジプトに渡り，その領土の統治権をクレオパトラに譲り渡してしまったことを知っていたシーザーとしては，アントニーと直接談判する気にもなれず，アントニーがオクテイヴィアに不義を働いていることを彼女に信じさせる。

ここでシーザーは公然と対アントニー作戦を起し，電光石火の勢いでギリシャのアクチューム近くに姿を現わす。アントニーは，エノバーバスの進言にさからって，陸上よりも艦隊に主力を注いでシーザー軍と対戦することに決める。いよいよ海戦が始まって，やがて勝負の行く末も五分五分

どころかアントニー側に有利と見えたその肝腎な時に，アントニーの艦隊を援護するはずだったクレオパトラの軍船60隻が一斉に退却してしまい，アントニーは「雌の尻を追う鴨よろしく，今酣(たけなわ)の戦いを打ち棄て，一目散に逃げ出す」に至る。これではとても指揮官についていけないとばかりに副官のカニディアスは麾下の全部隊とシーザー側に寝返る。

クレオパトラの艦隊が総退却したことでアントニーは初めは彼女を責めるが，まもなく，「さあ，口をくれ，これで何も彼も償われる」と彼女に言う。勇猛果敢で鳴らした武将が愛人とのキスひとつで敗戦の恥を忘れてしまうのだ。

アントニーは自分のかつての教師を遣わして，エジプト領内に進入して来たシーザーと談判させようとするが，シーザーはこの使者を退らせ，逆にサイディアスに，アントニーをクレオパトラから引き離して来いと命じる。一方，戻って来た教師の報告を聞いたアントニーは，シーザーとの一騎討ちを申し込む。これを見たエノバーバスは，シーザーが打ち破ったのはアントニーの軍勢だけではなく，彼の判断力もまた狂わされてしまったのだとつくづく思う。クレオパトラは，シーザーからの使者サイディアスを手厚く迎えるが，アントニーは使者を鞭で打つように命じるばかりか，クレオパトラに八つ当りして，「始めて会ったとき，貴様はシーザーの皿の上の冷めた食い残しだった，（中略）そうだ，お前には，貞潔とはどうあるべきか，大よそ見当はついても，それが実際どんなものか，解ってはいないからだ」と毒づく。彼女はジュリアス・シーザーの愛人だったことがあるのだ。

だが，これは痴話喧嘩もいいところで，またしてもアントニーとクレオパトラは和解し，アントニーは再度の戦闘にすべてを賭ける決心をする。が，このようにふらついてばかりいるアントニーを見るエノバーバスの目は冷たく，「どうやら，大将，脳味噌が減って，それだけ胆玉が太くなったということらしい。勇気が理性を食い始めると，ついにはお手の物の剣まで食いつぶしてしまうのだ。そろそろ手を切ることを考えねばなるまい」

と独白し，アントニーを棄てる機会の到来を待つようになってしまう。

シーザーは，アントニーの一騎討ち挑戦を嘲笑い，翌日に決戦を行うべく決心する。エノバーバスはアントニー側から寝返ってシーザーの陣営に赴くが，心が晴れず，あとに置いて来た身の回り品や家財がアントニーの親切な取り計いで送り届けられると，後悔の念がいっそう深まり，失意のあまり死ぬ。

この身はうとましいこの世に一人

決戦は初めはアントニー側に有利に展開するが，二日目の海戦でエジプト艦隊がシーザー側に降伏したためにみすみす勝利をとり逃してしまう。そこでアントニーはまたもやクレオパトラを責め，よくもおれを裏切ったなと毒づく。そういうアントニーの激怒に触れてクレオパトラは怯え，自分の廟に身を隠し，召使の宦官マーディアンに命じて，クレオパトラは自殺したとアントニーに伝えさせる。

これを聞いたアントニーはクレオパトラにならって自分も果てようと決意し，友人のエロスにおれを刺し殺せと頼む。エロスは「ああ，それだけはお許し下さいまし！」と断り，アントニーが顔をそむけている間に，「こうしておれはアントニーの死を見る悲しみから逃れられるのだ」と言って吾と吾が身を刺す。アントニーは「見事だ，おれは足元にも及ばぬ！　お前はおれに教えてくれたのだ，おお，エロス，おれのなすべきことを，そしてお前にはできなかったことを。女王とエロスはおれに勇気を教え，おれに代ってその名を記録に留めえたのだ。が，おれも死んで花婿になる，恋人の閨(ねや)に向うがごとく死の国に急ごう」と独語してみずから突き立てた剣に伏す。

虫の知らせか，クレオパトラはアントニーの意中を察知し，自分がまだ生きていることをアントニーに伝えさせ，それを知った瀕死のアントニーはクレオパトラのもとへ自分を運んでくれと頼む。

廟の近くに運ばれたアントニーはクレオパトラの部下たちの手で廟の上に綱で引き上げられる。そして，今度はクレオパトラを責めもなじりもせず，「ただ一言，女王。シーザーに乞うがよい，その身の名誉を。そして一身の安全を。おお！」とクレオパトラに勧め，昔を回顧して「その頃のおれは世界最高の君主，こよなき……今さら何でさもしい死に様を晒そうものか，同胞に兜を脱いで見せるような卑怯なまねをするものか……ローマの男がローマの男に雄々しく挑んで敗れたまでのこと。魂が，今おれの体を去ろうとしている，もう何も言えぬ」と呟いてこと切れると，クレオパトラは「この身はうとましいこの世に一人，お前の逝ってしまった後では，豚小屋にも等しいこの世に生きながらえねばならぬのか」と嘆く。

一方，アントニー死すの報に接したシーザーは嘆き悲しみながらプロキュリーアスを遣わして，何も恐れることはないとクレオパトラに伝える。ところが，廟の外にローマ軍の警備隊が配置され，実はシーザーはクレオパトラをさらし者にしてローマ市内を引き回す凱旋行進を行うつもりであることを，シーザーの部下ドラベラからクレオパトラは聞いてしまう。そこへシーザー自身が訪れ，クレオパトラを愛想よく遇するが，自殺だけはやめるようにと注意する。

クレオパトラは自分の持ち金，財宝などの目録をシーザーに渡し，それで殆ど全財産だ，と申し立て，財務官のセルーカスを呼んで，その通りだと証言させようとする。しかし，「何かこの身が隠しているとでも言うのか？」と問う女王に，セルーカスは「お申し附けの品を買い整えますのに必要なだけ」は，まだ手元に残してあるではありませんかと答える。シーザーはこの一件のことを別に何とも思わず，「クレオパトラ，分別ある御処置というものであろう」と軽く片づける。それでも，クレオパトラは徹底的にあしざまに「下郎，魂の無い悪党め，犬畜生！　おお，世にも卑しい奴！」とセルーカスを罵り，打ちすえる。

少し過去に遡るが，アントニー＝シーザー両軍の戦闘中にアントニーが部下スケイラスから報告を聞く時の様子は「時に勇猛果敢かと思うと，時に全く意気沮喪し，転変極まりない運命の骰子の目に気を取られ，その度毎の得失に望みをかけたり，悩んだりしている」というものであったし，

クレオパトラとの恋の駈引きにおいても一喜一憂の度が甚しかったのだが，片やクレオパトラも，女王の威厳と官能人のあさましさとの間を絶えず揺れ動いており，大詰近くのこのセルーカスとのやりとりでは，まさに滅びんとする女王が最後のあがきでエジプト王としての威厳を保とうといじましく苦心しているさまが手に取るように感じられ，批評家ブレンツ・スターリングの表現を直接使えば，「そこには墜ちた偉人というものが戯画的に描かれている」ということになる。

さて，シーザーが廟から去ると，ドラベラはクレオパトラに次のように言う。シーザーはシリア経由で帰路につく意向で，クレオパトラとその子らをローマに送ろうとしている，と。これを聞いたクレオパトラは，ローマの群衆の嘲笑にさらされるくらいなら，いっそアントニーのもとへ馳せ参じたいと言いきって，極上の衣装を身につける。死装束なのだ。クレオパトラはローマの街を引き回されると分るまではシーザーに恭順の意を示して来たのだが，自分の運命が不名誉なものとなることが分ると，掌をかえすように死を決意するのだ。揺れ動いてばかりいた心の最後の決断。呼び寄せた道化役から毒蛇アスプの入っている無花果の籠を受けとり，一匹のアスプを腕に，もう一匹を胸にあてがい，侍女のチャーミアンやアイラスと共に苦しみもだえることなく死んでゆく。

再び廟を訪れたシーザーは，女王らの死体を見ると，クレオパトラをアントニーと同じ墓に埋葬するように命じ，「地上のいかなる墓も，この二人ほど名高き男女を納めることはなかろう。このように大いなる出来事は，それを引き起した者の胸をも貫かずには措かぬ，二人の物語は世の人々の心を打ち，その死に哀悼を命じた勝利者の栄誉と共に永く忘れられぬであろう。（中略）さあ，ドラベラ，万事厳粛に取り行うよう手配を頼む」と宣し，ここで悲劇『アントニーとクレオパトラ』の幕が閉じる。

*

ブレンツ・スターリングは，「この劇の主要人物たちが意識的に，欠陥ある偉人を気どる時，皮肉にもその役割は彼らに拒否される。彼らは彼ら

自身になった時にいわば低音の尊厳を吾がものとするのだ。が，しかし，その尊厳も，この悲劇を道徳的リアリズムの枠内に終始とどめておく諷刺によって薄められ，限定される」とし，続けて「しかし大詰では，このかくも〈名高き男女〉に捧げられるシーザーの締め括りの演説がその諷刺を否定し，バーナード・ショーのいわゆる〈演劇的な崇高さ〉を導入する」と結んでいる。これを言い換えれば，シーザーのこの追悼演説は一種の外交辞令なのだが，外交辞令というものは必ずしも空疎なものであるとは限らないというところに，この掉尾を飾るシーザーの演説の複雑さがあるのだ。

このように，『アントニーとクレオパトラ』という甚だ現実的な悲劇には，悲劇がもたらしてくれるはずのカタルシスをもたらさないほど多くの痛烈な諷刺と皮肉が含まれているのであり，J・L・スタイアンの次の評言がこの悲劇の性格を最も適確に物語っているように思われる。

「あるいは高まり，あるいは低迷する戦闘場面のこのうねりは，この劇全体が進行してゆくさらに大きなうねりをいわばミニアチュアのように反映している。劇はローマとエジプトの間，冷厳な政治と，血の温みをもった人間関係の間を振れ動く。オクテイヴィアとエノバーバスの小悲劇さえもアントニーの問題を反映する。ディミートリアス，ファイロ（共に冒頭でアントニーのクレオパトラへののめりこみようを皮肉る人物），シーザーらの責任ある発言と，チャーミアン，アイラスらの無責任な言辞との間，アントニーのうちにある軍人と官能人の間，クレオパトラの二面である女王と官能人の間，それらの間を私たちは往き来するのであり，この劇のディレンマが表現されているこれら不調和の要素を悉く列記するのは不可能なくらいなのである。観念の起伏，そしてその浮動は観客の感性の上にみずからその運動を注ぎつくし，最後にクレオパトラの死そのものが人生の〈神秘な結び目〉を解きほごす。が，しかし，残された観客は人生というものの多義性の幾つかについて，心をゆさぶられるような，しかも微妙で複雑な実地の洞察を得て劇場から去るのだ。」

以上，私の観点から正しいと思われる評を少し紹介してみたが，反面，『アントニーとクレオパトラ』は今世紀の半ば頃から四大悲劇に並ぶ壮大な悲劇であるという批評が続出するようにもなったという意味で〈問題悲劇〉と称してもよい性格を有している。なぜこのように評価が大きく割れることになるのか。それは，冒頭に記したようにこの悲劇があくまでも史実に基づいているためである。

シェイクスピアはギリシャの歴史家プルタークの『英雄伝』の「アントニウス篇」(岩波文庫版第11冊) に記された事実を殆どそのまま採用してこの悲劇というか〈伝記劇〉を書いたという。そこでだが，伝記劇では，作品と現実との距離が，フィクション性の強い〈物語劇〉においてよりも短い。そして，『アントニーとクレオパトラ』においてシェイクスピアは一つのまとまったフィクションを創作しようとするよりも純粋に現実を再現することに力を注いでいたのであり，この作品に対する評価が大きく割れているのは，現実というものは物語よりも複雑だからである。

松原正

コリオレイナス

The Tragedy of Coriolanus

[主要登場人物]

ケイアス・マーシアス……後にケイアス・マーシアス・コリオレイナス
タイタス・ラーシアス
コミニアス
メニーニアス・アグリッパ
シシーニアス・ヴァリュータス
ジューニアス・ブルータス
……護民官
小マーシアス……コリオレイナスの息子
タラス・オーフィディアス……ヴォルサイの武将
オーフィディアスの副官
ヴォラムニア……コリオレイナスの母
ヴァージリア……コリオレイナスの妻

平和となるといい気にふんぞり返る

時は紀元前五世紀，場所はローマ，折しも市民たちが棍棒，棒切れなどの武器を手に議事堂を襲撃しようとしている。貴族共は「食べ過ぎている」が俺たち民衆は飢えて「骨と皮」，それゆえ，「俺たち民衆にとっては血も涙も無い犬」であるケイアス・マーシアスを殺し，「こっちの言い値通りに穀物を手に入れ」ようというのである。

そこへメニーニアスがやって来て民衆の無分別を窘(たしな)める。メニーニアスは言う，「お前たちの窮乏，饑饉のための苦しみは解る，だが，そうして棒切れを振り廻しローマ政府を責めたところでどうにもならぬ，(中略) 政府は既にお前たちの暴挙に備えているのだ。」そしてメニーニアスは一つの寓話を話してきかせる。ある時，体中の器官が胃袋に対して反乱を起した事がある，胃袋という奴は片端から御馳走を頬張るだけが能，己を抑えて他の器官と一緒に働こうという気が全くない，けしからんというのである。それに対して胃袋は答えた，なるほど俺は「食物という食物を真先に受け取る，が，それによって諸君は生きていられる」のではないか。

要するにメニーニアスは，貴族を「胃袋」に民衆を「他の器官」に譬えているわけだが，そんな譬え話なんぞに民衆が納得する筈は無い。しかも

Signet Classic Shakespeare, The……697
Some Shakespearean Themes……704
Something of Great Constancy : The Art of "A Midsummer Night's Dream" 712
Sources of Shakespeare's Plays, The……690
Stability of Shakespeare's Text, The……694
Staging of Elizabethan Plays at the Red Bull Theater, 1605–1625, The……700
Story of the Night : Studies in Shakespeare's Major Tragedies, The……708
Structure of "Julius Caesar", The……710
Style in "Hamlet"……711
Supplement for the Years 1930–35……683
Swearing and Perjury in Shakespeare's Plays……698
Textual Problems of the First Folio : "Richard III", "King Lear", "Troilus and Cressida", "2 Henry IV", "Hamlet", "Othello"……694
Theatre of the World……700 (191)
Themes and Variations in Shakespeare's Sonnet……714
This Great Stage : Image and Structure in "King Lear"……709 (677)
Time and Artist in Shakespeare's English Histories……706
To Be and Not to Be : Negation and Metadrama in "Hamlet"……711
Tragic Form in Shakespeare……708
Tragic Sense in Shakespeare, The……707
"Twelfth Night" and Shakespearean Comedy……712
Unfortunate Comedy : A Study of "All's Well That Ends Well", The……713
Unity in Shakespearian Tragedy : The Interplay of Theme and Character 704
Vocal Songs in the Plays of Shakespeare : A Critical History, The……690
What Happens in "Hamlet"……709
Wheel of Fire : Interpretations of Shakespeare's Tragedy, The……707 (676)
William Shakespeare : A Documentary Life……685
William Shakespeare : A Study of Facts and Problems……684, 715 (675–76)
William Shakespeare : His World, His Works, His Influence……687, 692
William Shakespeare : Shakespeare's Great Tragedies……708
William Shakespeare's Small Latine and Lesse Greeke……689
William Shakespeare : The Chronicles……705
William Shakespeare : The Complete Works (Alexander)……697
——— (Harbage)……697
——— (Sisson)……697
——— (Wells)……697
William Shakespeare : The Complete Works Original Spelling Edition……697
William Shakespeare: The Early Comedies……712
William Shakespeare : The Final Plays 714
William Shakespeare : The Histories……705 (329)
William Shakespeare : The Late Comedies……712
William Shakespeare : The Poems……715
William Shakespeare : The Problem Plays……713
William Shakespeare : The Roman Plays 708
Window to Criticism : Shakespeare's "Sonnets" and Modern Poetics, A……715
"The Winter's Tale": A Study……714
Works of William Shakespeare, The……697

シェイクスピアハンドブック

定価 3,500円

第1刷発行 1987年9月1日

編者 福田恆存
入江隆則
臼井善隆
喜志哲雄
中村保男
松原正

発行者 株式会社三省堂
[代表者] 守屋眞明

印刷所 明和印刷株式会社

発行所 株式会社三省堂
〒101東京都千代田区三崎町二丁目22番14号
電話—編集〈03〉230-9411
販売〈03〉230-9412
総務〈03〉230-9511
振替口座—東京6-54300

〈シェイクスピアハンド・776pp.〉
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-385-35275-5